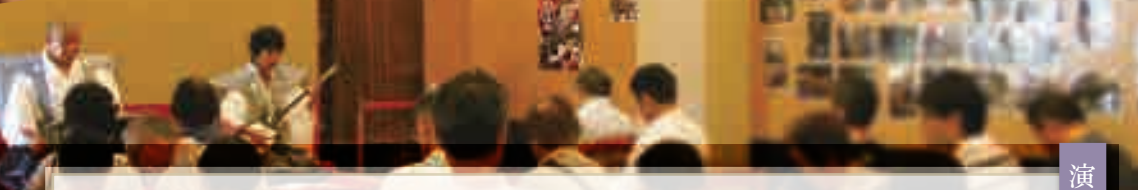




長浜曳山まつり
Nagahama Hikiyama Festival



三役修業塾 定期発表会

演目

六月十九日(日)

一、絵本太功記十段目

浄瑠璃 千鳳大夫
(藤澤康行)

尼ヶ崎の段(前)

三味線 龍三
(小池充)

二、絵本太功記十段目

浄瑠璃 壽大夫
(伊藤八壽男)

尼ヶ崎の段(中)

三味線 賀桜
(西村知子)

七月十七日(日)

番外、壽式三番叟

一、仮名手本忠臣蔵七段目

浄瑠璃 美帆賀大夫 三味線 桐賀
(中橋恵美子) (七里八須子)

二、新版歌祭文 野崎村の段

浄瑠璃 甚大夫 三味線 龍三
(桐山恵行) (小池充)

八月二十八日(日)

一、奥州安達ヶ原三段目(前)

浄瑠璃 龍一大夫 三味線 湊祝
(小池市郎) (馬上拓磨)

二、奥州安達ヶ原三段目(後)

浄瑠璃 賀桐大夫 三味線 賀祝
(片桐秀樹) (下村浩司)

(指導) 豊澤 千賀龍
豊澤 賀祝

平成 28 年

6月19日(日)・7月17日(日)・8月28日(日)

会場

長浜市曳山博物館
市民サロン

入場料

無料
申し込み不要



竹本義太夫像

14時より開演

三役とは「振付」「太夫」「三味線」のことを指し、曳山祭の子ども歌舞伎にとって欠くことのできないものです。三役修業塾は平成2年に開講し、毎年数名の塾生が曳山祭に出演しています。この人材育成こそ重要無形民俗文化財である曳山祭を支え、ユネスコ無形文化遺産登録に向けて重要な活動です。祭の伝承に対する熱い思いを持つ塾生の精進の成果をご覧ください。

6月19日

絵本太功記十段目 尼ヶ崎の段

長浜曳山祭に深く関わりのある秀吉の出世譚を謀反人である明智光秀を主役に仕立て、本能寺の変から山崎の合戦に題材を得た作品。

尼ヶ崎の段は十段目にあたり、「太十」と呼ばれる。

小田春永(織田信長)を討った武智光秀は、中国から戻る真柴久吉(羽柴秀吉)を迎え討とうとしたが、あと一步のところまで久吉の家臣加藤正清(加藤清正)らによって阻まれた。(前段まで)

光秀の母臯月は倅が主君を討ったことを恥じ、尼ヶ崎に隠居。そこに九死に一生を得た久吉が旅僧となって、一夜の宿を求めて潜んでいる。また、光秀の妻操、倅十次郎の婚約者初菊も臯月のご機嫌伺いに来ている。十次郎は出陣の許しを願うため、祖母に会いに来ていた。十次郎は初菊と祝言を交わし、出陣していく。光秀は久吉がこの隠居に来ていることを知っており、仕留める機会を窺っていた。風呂場で聞こえる物音は久吉のものと、竹鍵で物陰から突くと誤って臯月を刺してしまう。刺されて、息絶え絶えながらも主君を討った光秀を責める。操も光秀を諫めるが、聞き入れず、武士の道を貫いたと主張する。

7月17日

仮名手本忠臣蔵七段目 祇園一力茶屋の段

大星由良之助は敵方の目を欺くため、茶屋遊びの放蕩三昧。そこに主君の御台所から密書が届き遊女お軽は密書を恋文と思い、盗み見してしまう。また、敵方のスパイ斧九太夫にも読まれてしまう。密書を読まれたことに気付いた由良之助はお軽を請け出し、口封じを図る。お軽が身請けされると喜んでるところへお軽の兄平右衛門が現れる。お軽から由良之助に身請けされる話と密書を読んだ話を聞くと、由良之助が身請けする理由を察知する。それなら自ら妹を手に掛けて、それを手柄に仇討に加えてもらおうと斬りかかろうとする。お軽も夫の死や父の死の事実を知らされ、絶望し、覚悟を決める。そこに由良之助が現れ、二人の思いがわかり、平右衛門の仇討の仲間入りを許し、お軽を自由にするのであった。

新版歌祭文 野崎村の段

野崎村に住む百姓久作には妻の連れ子お光という娘がいる。また、もうひとり久松という息子がいるが、久松は元々武士の子。お家断絶のため、乳母である久作の妹を頼り、久作が養子としたのである。久松は大坂の油屋という質屋の丁稚奉公に出されていたが、濡れ衣を着せられ久作のもとへ帰されていた。久作はこれを機にお光と久松に契りをあげさせようと、急遽祝言の準備をする。お光は久松と一緒にすることを喜びうきうきしていると久松の奉公先の娘お染が訪ねてくる。お染は久松と恋仲であり、居ても立ってもいられず久松を追いかけてきた。玄関先で声をかけるとお光が出てくる。お光も恋敵とわかると意地悪くお染にあたる。祝言の準備とお光と久作が奥に入ると、お染が家の中に入り、久松に思いを告げる。久松はお染に諦めるよう諭すが、お染は死を覚悟し剃刀で死のうとする。久松も同じ覚悟であることを告げるが、奥で聞いていた久作は二人に思いとどまるよう諫める。お光は二人の覚悟がわかると尼となり身を引く。お染は迎えに来た母親と久松は別々に大坂へと戻る。それを見送るお光は泣き崩れるのであった。

8月28日

奥州安達ヶ原三段目

環の宮の養育係平倅は環の宮の行方不明の責任をとって、切腹することとなった。倅と浜夕のあいだには敷妙と袖萩という二人の娘がいる。敷妙は源義家の妻となり、袖萩は黒沢左中という浪人と駆け落ち、倅夫婦はそのため袖萩を勘当した。その後、袖萩は盲目となったが父親が切腹することを聞きつけて、娘のお君に手を引かれて、この環の宮の御殿に来て門口でこれまでの不孝を詫がる。倅の切腹を見て現れた桂中納言を奥に居合わせた義家が安倍貞任と見破る。貞任こそ袖萩の夫であり、倅に切腹することを告げる使者として桂中納言に化けて、宮中に入り込んでいたのである。貞任と義家は戦場での再会を約束して別れる。